

〔論文〕

幼児期における自尊感情を育てる取り組み

—保育・教育現場における行事や活動を通して—

八重津 史子
Fumiko Yaezu

城南学園保育園

本研究の目的は、具体的な保育実践として“誕生日会”、“当番活動”を取り上げ、どのような取り組みが「自尊感情」を育むことにつながるのか具体的な活動を見出ししていくこと、また、幼児の自尊感情を測定するための尺度を作成し、“誕生日会”、“当番活動”の取り組み方による違いを見出すことである。

調査の結果、本研究における自尊感情の定義に含まれる要素である自己肯定感因子、自己受容因子の2因子からなる一定の信頼性、妥当性を備えた「幼児用自尊感情尺度」を作成することができた。

また、当番活動の取り組み方の違いによる自尊感情の育ちについて、「幼児用自尊感情尺度」、「自己受容尺度」で有意差が見られた。「幼児用自尊感情尺度」を構成している具体的な質問項目の内容と子ども達の反応から、子どもの自尊感情の育ちを図るために尺度が適用可能であるという結果が得られた。

追加調査では、“誕生日会”の前後で子ども達の自尊感情の変化を図ると共に「幼児用自尊感情尺度」の適用の可能性を確認した。“誕生日会”の取り組みを通して、幼児用自尊感情尺度、自己肯定感尺度、自己受容尺度すべてにおいて得点が有意に上昇し、子どもの自尊感情の明らかな変化が見られた。

保育、教育現場において意識的に子どもの自尊感情を育てていこうとすることで、その育ちを確かなものにできると考えられる。

キーワード：幼児、自尊感情、自己肯定感、誕生日会、当番活動

I. 問題と目的

1. 問題

(1) 自尊感情の意義

幼児期は人間の人格形成の基礎がなされる大切な時期である。しかし、近年の子どもを取り巻く環境は厳しく、「核家族化や少子化が進み、人間関係が希薄になり、実体験から学ぶ機会が減少している（勝浦，2014）」。保育現場においても、困難に出会うとすぐにあきらめてしまう子ども、自信がなく失敗を恐れる子ども、自分で考えて主体的に行動することが苦手な、受身に依存性の高い子ども達が多く見られるようになった。古荘（2009）は、このような子どもの心の問題の背景に自尊感情（self-esteem）の低下があると指摘する。また、国際比較において、日本の子ども達の自尊感情が外国の子ども達と比べて極めて低いと言う（日本青少年研究所，2011）。虎杖（2014）によると「近年、教育現場では、子ども達の「自尊感情」を育むことが急務とされている。その背景として、物事を最後までやり遂げる体験が少ないこと、自分に自信をもつことができず、自立する力が育っていないこと、人間関係が希薄で集団としてのつながりが弱いという現状の問題が少なからずあるためである」と述べら

れている。

自己への肯定的な感情は、人が生きていく上で大変重要なものである。無条件に自分の存在を認める感情、すなわち自分の存在が誰かにあるいは何かにとって貴重であり、ありのままに価値があるのだと感じること、その感情を日々の生活や関わりの中でしっかりと定着させていくことが子どもの生きる力の基礎となるのではないだろうか。

「幼稚園教育要領」第1章第1節幼稚園教育の基本において、「教育は子どもの望ましい発達を期待し、子どもの潜在的な可能性に働きかけ、その人格の形成を図る営みである。特に、幼児の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている」、また、「幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく」とある。「保育所保育指針」第1章3. 保育の原理（1）保育の目標には「保育所は生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期にある乳幼児の現在が、心地よく生き生きと幸せであること」を保育の目標とするとともに、「その未来を見据えて長期的視野をもって生涯にわたる生きる力の基礎を培うことを目標として保育することが重要である。それは、生涯、発達し続けていく

一人一人の子どもの可能性やあと伸びする力を信じることであり、保育とは、子どもの現在と未来をつなげる営みと言える」としている。また、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」第1章第1節1. 教育及び保育の基本において、「幼稚園教育要領」第1章第1節教育の基本と同じ内容が同じ表現で述べられている。

幼児は環境との相互作用の中で、体験を深めながらその心を揺り動かし、人格を形成していきと言え。幼稚園、保育所、認定こども園の現場、保育者には、生きる基礎を育てる上で人格形成という役割が求められている。

中間（2007）は、「自らが働きかけることによって周囲が応答してくれるという経験は、子どものコンピテンス（有能感）を育てる基礎と考えられているが、コンピテンスは成功体験と密接に結びついており、日常生活で繰り返される一つ一つの経験が、自分がコンピテントであるという感覚を支える経験となる。その感覚を確かなものにするのは、他者からの賞賛や承認、励まし、評価、共感であり、このコンピテンスの感覚は自尊感情を支え、さらに自分が自信をもって行動するための心理的基盤となる。つまり、自尊感情は、肯定的な過去を刻むとともに、肯定的な未来へと自分をつなぐ役割も果たす」としている。このことから、幼児の人格形成に携わる保育者が意識的に子どもの自尊感情を育もうとすることの重要性が窺える。

（2）自尊感情の定義

自尊感情尺度を作成した Rosenberg（1965）は、自尊感情には二つの異なった側面があることを指摘している。一つは、個人が「とてもよい（very good）」と感じる側面であり、もう一つは、自分は「これでよい（good enough）」と感じる側面であると言う。どちらをもって自尊感情とするかには様々な主張がある。「とてもよい」の自尊感情とは他者を評価の基準にすることによる「自信」や「有能感」を意味するものであり、眞榮城（2010）がこの立場にあたる。それに対し「これでよい」の自尊感情とは、ありのままの自分を受け入れる「自己受容」を意味するものであり、汐見（1997）や佐々木（1998）がこの立場にあたる。前者は「～できる自分はとてもよい」という、自分のある部分的な能力や特性に対する評価感情であり、後者は「～できない自分もこれでよい」というすべての要素を含めた包括的な自分に対する評価感情であると言える。

これと類似したものとして近藤（2007）は「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」に着目し、「とてもよい」という側面を社会的自尊感情、「これでよい」と感じる側面を基本的自尊感情とした。この二つの側面をバランス

よく育てることが重要であり、「社会的自尊感情」とは向上心の下支えとして重要な感情としている。また、「基本的自尊感情」とは自尊感情の基礎、いわば絶対的、無条件に自らの存在を認める感情、自分は生まれてきてよかったという感情であり、基本的自尊感情の上に社会的自尊感情が乗っているというのが、自尊感情の構造であるとしている。土台となる基本的自尊感情がしっかりと育まれていなければ、不安定な自尊感情となってしまうのである。

また、園田（2007）は、自尊感情を「自分に対する肯定的な感情、自分についてそれなりの能力とよい面をもった大切な存在とする感覚」とし、「その感覚が一時的であったり、浮遊的であったりするのではなく、個人の中にある程度、安定して存在しているというところに自尊感情の特徴がある」と述べている。「ゆえに自尊感情は子どもに対して大人が促成栽培するものではなく、一方的に外から注入するものでもない。自尊感情は、家庭で、学校で、友達関係を通して、また、社会の中でじっくりと人と人との肯定的な関わり体験を基盤にしなが醸成していくことが不可欠となり、その際に、かかわる大人も子どもとの関わりを通して、さらに自己の自尊感情を育てていくといったような共有の姿勢が必要条件となる」としている。これらのことから、人格を形成していく最初の段階である幼児期において必要なのは、基本的自尊感情をしっかりと育てていくことであると考えられる。子どもが無条件に自分の存在をありのままに認める感情、自分は生まれてきてよかったという感情を日々の生活の中で、人との関わりの中でしっかりと定着させていくことが、現代の子どもに求められている生きる力の基礎になると考えられる。そこで、本研究は、幼児期の自尊感情の育ちに着目して行うこととする。

そして、本研究における自尊感情の定義は『自分が価値のある人と感じ、自分のできること、できないことなどすべての要素を包括した意味での「自分」を他者との関わり合いを通して、かけがえのない存在として捉える気持ち』とする。

2. 目的

自尊感情に関する先行研究の流れとして「自尊感情を育むための親、または保育者のあり方」、特に、ほめること、叱ることについての研究が多くなされている。（たとえば山宮、2013；園田、2013；青木、2013；中嶋、2014；古荘、2014；など）。それらの知見をまとめると、叱ることについては、叱る対象はあくまで問題のある行動についてであって、その子どもの人格を否定することはしないようにすべきである。ほめることについては、言葉と共に

ストロークを多く与えることで子どもの心は安定し、充足感や満足感が大きくなるということが言われている。これらは、いずれも自尊感情を育む上で必要な行動である。

しかし、具体的な保育の現場における保育内容や行事と自尊感情との関わりについては、あまり検討がなされてきていない。自尊感情を育てるには、上述したように人と人との肯定的な関わり体験を基盤にしながら日々の生活の中での体験を積み重ねていくことが必要である。

そこで、本研究においては、具体的な保育実践を通して自尊感情が育まれる取り組みを考える。子どもの自尊感情が育まれると考えられる機会は他にも多々存在するが、本論では、具体的な取り組みとして多くの園で広く行われている誕生日会、当番活動を取り上げることとする。筆者の勤務していた幼稚園では、毎月行われる誕生日会にはその月に誕生日を迎える子どもの保護者が参加していた。その際には、子どもの生まれる前から今日までのことを保護者の思いをこめて話してもらうという取り組みを続けてきた。この経験を通して、子ども達が、命の大切さ、一人の子どもの存在がどれほど大切でかけがえのないものであるかということに気付き、喜びを共有する機会となっていた。その姿から、ありのままの自分を受け入れる自己受容感の育ちが感じられた。

また、当番活動は、各年齢において仕事を決めて日々活動しており、それは、責任をもって役目を果たし、皆が喜び、感謝されることを通して自己有用感を感じる活動になっていた。自己受容感、自己有用感はいずれも自尊感情の育つ基盤となるとされている(下田, 2011)。そこで、どのような取り組みが自尊感情を育むことにつながるのか、主に誕生日会、当番活動について調査を進めることとする。

また、その調査に使用する幼児の自尊感情の育ちを測る尺度を作成する。自尊感情についてはRosenbergをはじめ多くの研究がなされてきた。しかし、自尊感情関連の心理尺度は主に小学校低学年から青年期を対象にしたものであり、子ども版自尊感情尺度とされるPopeらの作成した子ども用5領域自尊心尺度(下田, 2011)も小学生以上を対象としている。子ども版QOL尺度(古荘(訳), 2009)が4歳から16歳の子どもと4歳から16歳の子どもをもつ保護者を対象にしているが、これは自己記述式兼他者評価式であり、幼児にとって自己記述式という方法が必ずしも全員に可能ではないことを踏まえると、使用することは難しい場合もあると思われる。また、幼児用自尊感情測定尺度(中井, 2015)は幼児を対象としているが、尺度の具体的な項目は対人関係、主に友達関係を中心に作成されており、子ども達が集団生活をお

くる過程で友達との関わりを通して自尊感情を構成する自己有能感、自己効力感、自己有用感が育つという考えのもと作成されている。本研究で具体的な保育実践を通して育まれる自尊感情を図る上では独自の尺度が必要であり、そのために新たに幼児用の自尊感情尺度を作成することを併せて目的とする。

II. 事前調査

1. 目的

事前調査では、各園の誕生日の祝い方、子どもの当番活動の取り組み方について具体的に聞くとともに、その背景として、保育方針、設定保育・自由保育の割合、ほめ方、叱り方について特に心がけていること等を聞くこと、その結果をもとに、子どもの自尊感情の育ちに違いがあるのかどうかについて調べる本調査での対象となる園を選び出すことを目的とした。

2. 方法

アンケートを作成し、「保育内容に関する調査」として、各園の「園全体の方針について」、「誕生日の祝い方について」、「子どもの当番活動について」の三項目でそれぞれ具体的な質問を作成し、記述式で回答することを求めた。調査対象は、大阪府、兵庫県、奈良県内の公私立幼稚園、保育所、認定こども園の園長または主任35名であった。

3. 結果と考察

誕生日会の祝い方については全園において特別なプログラムがあり、一人一人が大切に祝われていることが結果として得られた。一人一人の子どもが生まれたこと、園での出会いがあり共に成長していることを皆で喜び合い、具体的に誕生日会で祝う機会をもっているという園が34園であった。1園だけ、一人一人の誕生日当日にお祝いをしており、特に誕生日会はしていないという保育園があった。当日が休日の場合は、事前にお祝いをするとのことであった。この園に、誕生日会という形をとらない理由を聞いたところ、一人一人の誕生日にお祝いをすることに意味があると考えているという返答を受けた。この祝い方の背景として「日々の生活に精神的にも経済的にもせいっぱいである家庭が多く、子どもの誕生日に対する意識も薄くて家族に誕生日のお祝いをしてもらうという経験がない子どもが多いということがあってこのような形をとっている」とのことであった。子ども達の現実を受け入れ、園でできることを考え、行っていくことの必要性が表れている結果である。

一方、毎月誕生日会を行っている園は、それぞれにその月に誕生日を迎えた子ども達を主役として祝うためのその日だけの特別なプログラムが考えられていた。保護者の来園については、保育所はすべて来園しないという回答であった。その理由としては、「来園するプログラムにしたいが、現状では無理である。」(10園)、「来園の必要は感じていない。」(2園)と記述されていた。仕事をもつ保護者にとって平日に休暇をとって来園することが困難である。来園を依頼した場合、来園できる保護者とできない保護者がおり、子どもにとってよい結果にはならないということであった。保育所に限らず両親の就労率が高くなるにつれて、幼稚園、認定こども園においても課題になってくることである。保護者からのメッセージについては、保護者が来園しない場合においても依頼しているという園もあり、その場合は担任が伝えたり、本人のアルバムに貼ったりするということがあった。メッセージの内容として、生まれた時の様子、生い立ち、命名についてというのは、生まれた子どもに対する親の思いを言葉にして表し、当事者である子どもも周りの子ども達も、一人一人の子どもがどれほど大切にかけがえのない存在であるかということを受けとめることができる内容である。メッセージは、保護者が来園する場合は、全園、誕生日会の中で保護者が直接伝えるとい

う回答であった。メッセージを保護者に依頼する意味がここにも見られる。事前調査における誕生日会の取り組み方を Table 1 にまとめた。

当番活動については、全園が行っているという回答であった。1日の保育の中での様々な場面で、子ども達はその日の当番として決められた役目を責任をもって果たすという経験が必要で大切にされているという結果である。当番の役割は、子ども達が自分たちで行えることで、自分の力でやり切ったという実感がもてるような内容になっている。出欠状況を職員室に伝える、体操の時に皆の前でするといのは、子ども達にとってその日の当番がクローズアップされるということによって特別な役割になっているという回答もあった。子ども達にとって当番だから特別という思いは当番活動を行う上で励み、自信につながる大切な思いであると考えられる。当番活動を行うことによって子ども達に育ったと思う点については、「主体性、自律心、責任感、自主性と共に自己有用感、自己有能感、自己肯定感の育ちが感じられ、そのことによって達成感、満足感が生まれ自信をもつことができた」という回答であった。田中(2015)は、「当番活動を行った子ども達に対して、周囲の大人が感謝の言葉を口にすることで人の役に立つ喜びを感じ、最後までやり遂げることに對する達成感を感じることによって自信がつくこ

Table 1 誕生日会の取り組み方について—事前調査アンケート—

項目	幼稚園	保育所	認定こども園
1. 誕生日の祝い方について (複数回答あり)			
・各月ごとに誕生日会を行っている	13	10	9
・2ヶ月に1回、誕生日会を行っている	0	2	0
・誕生日会は行わない	0	0	1
・一人一人の誕生日にお祝いをする	13	12	10
2. 保護者の来園について			
・来園する	10	0	6
・来園しない	3	12	4
3. 保護者が来園する場合の参加の仕方			
・プログラムに参加する	9		5
・プログラムには参加せず見ている	1		1
4. 子どもへのメッセージの依頼について			
・依頼する	10	6	7
・依頼していない	3	6	3
5. メッセージを子ども達に伝える方法について			
・誕生日会で、クラスの子ども達に保護者が話す	9	0	5
・誕生日会で、保護者が書いたものを保育者が読む	1	4	1
・1年間のアルバムに貼る (園で製作するもの)	0	2	1

幼稚園：13 保育所：12 認定こども園：10

とで、さらに自分で判断して自分で行動することに繋がる」と言う。

事前調査のアンケートの回答から、保育者は誕生日会、当番活動を行うことによって、子ども達が自分が必要でかけがえのない存在であるということ、ありのまま愛されているということを感じ、自己受容感、自己有用感、自己有能感、自己肯定感が育つと感じているという結果が示された。これらは自尊感情を育てる上で必要な要素である。様々な背景をもつ一人一人の子ども達の自尊感

情を育てていく責任のある保育の中で、誕生日会、当番活動が大切に位置づけられていることは意味のあることである。

次に、事前調査の集計により、各園の保育方針、ほめること、叱ることについて特に意識していることについては大差がなかったため、誕生日会、当番活動の内容を比較検討した結果、次のように4園を本調査の対象として選び、調査内容により2グループに分けた。4園の特徴を Table 2 に示した。

Table 2 本調査を行った4園について

	A - a	A - b	B - a	B - b
1. 園の規模	約 80 名	約 90 名	約 180 名	約 150 名
2. 環境	閑静な住宅地	商業地区	市街地	郊外の新興住宅地
3. 保護者の特徴	教育に関心が高い 就労率は約 50%	長時間就労が多い 就労率は 99%	教育に関心が高い 就労率は低い	教育に関心が高い 就労率は低い
4. 保育方針	一人一人の個性を 大切にする保育	一人一人の可能性を 伸ばす保育	遊びを通しての総合 的指導を行う	のびのび保育
5. 設定保育、自由保育の割合	設定：20% 自由：80%	設定：50% 自由：50%	設定：50% 自由：50%	設定：30% 自由：70%
6. ほめることについて心がけていること	言葉を大切に具体的にほめ、保育者の嬉しい気持ちを伝える	本人を丁寧にほめることと共に、周りにも伝える	丁寧にほめる保育者と共に喜び合う	自己肯定感につながるように心がけている
7. 叱ることについて心がけていること	子ども自身を否定しないこと。何がいけなかったのか子どもにわかるよう丁寧に伝える	何がいけなかったのか具体的に伝える。後のスキンシップを大切にしている	具体的にわかりやすく伝える。子ども自身を否定しないように心がけている	子ども自身を否定せずいけなかった行動をわかりやすく伝える

A グループ：認定こども園 2 園

誕生日会の祝い方において比較する

園 a：誕生日会に保護者が出席し保育に参加し 1 日を共に過ごす。

また、クラス子ども達に自分の子どもの生まれる前から今日までのこと、保護者の思い等を話すという取り組みを行っている。

園 b：誕生日会に保護者は出席しない。メッセージは依頼していない。

両園とも当番活動は同じような活動内容である。

B グループ：幼稚園 2 園

当番活動において比較する

園 a：職員室に出席人数を知らせる、給食の配膳を手伝う、

昼食、降園時の挨拶等に加えて、朝の会、終わりの会の司会、進行を行っている。

園 b：給食の配膳の手伝い、掃除の手伝い、降園時の挨拶を行う。

両園とも誕生日会の取り組みは同じような内容である。

Ⅲ. 本調査

1. 目的

まず、幼児に適用できる幼児用自尊感情尺度を作成し、信頼性、妥当性について検討を行う。また、子ども達に個別に聞き取り調査を行って尺度を実施し、どのような取り組みが自尊感情を育むことにつながるのか、誕生日会、当番活動の取り組み方を通して見出す。

仮説としては、Aグループでは、誕生日会において保護者が出席して共に1日を過ごし、クラスの子ども達に自分の生まれる前から今日までのこと、保護者の思い等を話すという取り組みをしている園のほうが、子ども達の自尊感情の得点が高いのではないだろうか。Bグループでは、当番活動において園生活のお手伝いに加えて、朝の会、終わりの会等で司会、進行の役目を行っている園のほうが、子ども達の自尊感情の得点が高いのではないだろうかと設定した。

2. 方法

(1) 調査対象者

大阪府、奈良県の幼稚園および大阪府、兵庫県の認定こども園に通う305名の年長児、年中児（年長児：155名、年中児：150名）。

Aグループ

園 a	54名	年長：25名	年中：29名
園 b	42名	年長：21名	年中：21名

Bグループ

園 a	108名	年長：56名	年中：52名
園 b	101名	年長：53名	年中：48名

(2) 調査期間

2016年9月～10月にわたり実施した。

(3) 調査材料

本研究における自尊感情の定義に含まれる自分ばかりがえのない存在であると感じること、自己受容感、自己有用感、自己有用感、自己価値感、基本的自尊感情 (good enough)、自己肯定感、また、Popeらによる子ども用5領域自尊心尺度 (下田, 2011)、子ども版 QOL 尺度 (古荘 (訳), 2009)、幼児用自尊感情測定尺度 (中井, 2015) を参考に11項目からなる「幼児用自尊感情尺度」を作成した。尺度作成にあたっては、子どもの心理・健康領域を専攻する大学院生3名と臨床心理学を専門とする大学院教員1名とで内容的妥当性について十分検討を加え決定した。質問項目の内容については、幼児期の子どもが理解できるような内容になっているか、幼稚園、保育所、認定こども園の園長3名に確認を依頼した。結果、年中組、年長組の子ども達に理解しうるとの返答を受けた。

回答については被調査者に反応4選択肢の内、該当する選択肢を手で指すことを求めた (中井, 2015)。○は大きさと色を変え反応選択肢を表記した。

さらに予備調査を行い、その結果をもとに質問項目の順番や反応選択肢の修正を行って、本調査で使用する尺度とした (Table 3, Figure 1)。

(4) 手続き

本調査に際して、実施を受け入れた幼稚園、認定こども園の園長、担任と調査の目的や内容について説明、話し合いを行って理解を求めた。

調査を実施するに際して、静かで注意が散漫にならず集中できるよう、保育室とは別の部屋を利用した。

調査は個別式対面面接法で行い、面接時間は幼児一人につき10分～15分程度とした。また、園長、保育者と話し合い、子どもの状態や当日の保育カリキュラムを考

Table 3 幼児用自尊感情尺度 (本調査用)

1. 私は皆と仲良くできていると思います。
2. 私はどんなことも一生懸命できます。
3. 私は大事な子どもだと思います。
4. 皆は私のことが好きだと思います。
5. できないことがあってもだいじょうぶだと思います。
6. 私は自分のことが大好きです。
7. 誰かが困っていたら助けたいと思います。
8. 失敗してもだいじょうぶだと思います。
9. 私はこのままですてきだと思います。
10. 困ったことがあったら、誰かに「助けて」と言えます。
11. 私にはいいところがたくさんあります。

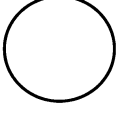
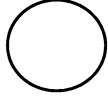


			
とてもそう思う	そう思う	少しだけそう思う	あまり思わない

Figure 1 本調査用反応選択肢

慮し、登園後、朝の自由活動を終えた後もしくは午後の自由活動中に順次行った。

質問に際しては、尺度の項目を年齢に応じてわかりやすいようマニュアルを作成して同じ条件下で行うよう配慮した。

3. 結果

(1) 幼児用自尊感情尺度の因子分析

調査の結果を「とてもそう思う」を4点、「そう思う」を3点、「少しだけそう思う」を2点、「あまり思わない」を1点として算出した。

幼児用自尊感情尺度について、まず全項目を用いて主因子法による因子分析を行ったところ、原項目の1“私は皆と仲良くできています”、2“私はどんなことも一生懸命できます”、7“誰かが困っていたら 助けたいと思います”の共通性がそれぞれ .17、.10、.14 と低かったため分析から除外することとした。

よって、残った8項目について再度主因子法による因子分析を行った。その結果著しく共通性の低い項目は見られなかったためこの8項目について解釈を行ったところ、説明分散および項目の因子に対する負荷パターンより2因子が適当と判断された(因子相関は .42であった)。2因子による累積説明率は37.25%であった。プロマックス回転後の因子負荷量を Table 4 に示す。

第1因子は原尺度の自分の可能性を信じ、肯定的に自己を受けとめていると考えられる項目の負荷量が高かったため「自己肯定感因子」と命名した。第2因子は原尺度の自分ができない面、否定的な側面もすべてを含めてよいと受けとめていると考えられる項目の負荷量が高かったため「自己受容因子」と命名した。また、各因子に負荷量の高かった項目によって構成される尺度をそれぞれ「自己肯定感尺度」、「自己受容尺度」と命名した。

(2) 幼児用自尊感情尺度の内的整合性(信頼性)

尺度の信頼性の検討のため、Cronbachの α 係数を算出したところ自己肯定感尺度は .667、自己受容尺度は .748、全体では .726であった。項目を除外した際の信頼性係数が高くなる項目は見られなかった。

(3) 幼児用自尊感情尺度の妥当性

幼児用自尊感情尺度の併存的妥当性に関して検討するために、本調査とは別に大阪府の認定こども園、保育所の幼児23名に調査を行った。具体的には、幼児用自尊感情尺度を実施するとともに、自尊感情の育ちに関わりがある対人関係を中心に作成された、9項目3因子(自己有能感・自己効力感・自己有用感)からなる幼児用自尊感情測定尺度(中井, 2015)を基準尺度として使用し、Pearsonの相関係数を算出した。その結果を Table 5 に

Table 4 原尺度項目のプロマックス回転後の因子負荷量および得点の平均・標準偏差

項目内容	因子1	因子2	平均	標準偏差
4 皆は私のことが好きだと思います。	.64	-.08	3.10	.84
3 私は大事な子どもだと思います。	.58	-.05	3.41	.74
11 私にはいいところがたくさんあります。	.56	.10	3.27	.67
9 私はこのままですてきだと思います。	.52	.10	3.16	.79
6 私は自分のことが大好きです。	.33	.14	3.16	.88
5 できないことがあってもだいじょうぶだと思います。	-.14	.94	2.74	.98
8 失敗してもだいじょうぶだと思います。	.18	.59	2.65	.93
10 困ったことがあったら、誰かに「助けて」と言えます。	.18	.30	2.97	.89
因子寄与	1.86	1.73		
因子相関		.42		

Table 5 幼児用自尊感情尺度と幼児用自尊感情測定尺度（中井，2015）との相関

		幼児用自尊感情尺度（本研究）		幼児用自尊感情測定尺度（中井，2015）		
		自己肯定感	自己受容感	自己有能感	自己効力感	自己有用感
幼児用自尊感情 尺度	自己肯定感	1				
	自己受容感	.172	1			
幼児用自尊感情 測定尺度	自己有能感	-.040	-.094	1		
	自己効力感	.281	.171	.096	1	
	自己有用感	.357*	.051	.314	.478*	1

* $p < .05$

示した。幼児用自尊感情尺度の自己肯定感尺度と幼児用自尊感情測定尺度の自己有用感尺度は $r = .357$ ($p < .05$) で弱い相関が見られた。一方、自己受容尺度と幼児用自尊感情測定尺度では相関は見られなかった。

(4) 誕生日会、当番活動の違いによる自尊感情の比較

本調査の対象園として選び出した A グループ（認定こども園 2 園、誕生日会の祝い方で比較）、B グループ（幼稚園 2 園、当番活動で比較）それぞれの 2 園（園 a、園 b）について、幼児用自尊感情尺度およびその下位尺度、さらにその各項目の平均値を比較するために t 検定を行った。その結果、誕生日会について比較した A グループはいずれの尺度、項目も有意差は見られなかった。自己肯定感尺度の平均値は、園 a が 16.07、園 b が 16.38、標準偏差は、園 a が 2.34、園 b が 2.39 であった。自己受容尺度の平均値は、園 a が 8.46、園 b が 8.48、標準偏差は、園 a が 2.19、園 b が 2.24 であった。幼児用自尊感情尺度の平均値は、園 a が 24.54、園 b が 24.86、標準偏差は、園 a が 3.51、園 b が 4.05 であった。

当番活動について比較した B グループは、幼児用自尊感情尺度で有意傾向 ($p < .10$)、自己受容尺度で有意差 ($p < .05$) が見られ、園 b のほうが得点が高かった。また、“できないことがあってもだいじょうぶだと思います” ($p < .01$)、“失敗してもだいじょうぶだと思います” ($p < .05$)、“私にはいいところがたくさんあります” ($p < .01$) の 3 項目で有意な差が見られ、園 b のほうが得点が高かった。B グループの結果を Table 6 に示す。

4. 考察

幼児用自尊感情尺度の因子分析の結果、本尺度は 2 因子から成り立っていることが明らかになった。幼児の自尊感情は、自分はありのままに大切な存在であると感じている自己肯定感因子、できないことがあっても、失敗してもそのことも含めて必要な存在であると感じている自己受容因子で構成されていることがわかった。

幼児用自尊感情尺度の信頼性の検討を行うため算出し

た α 係数から、本尺度は一定の内的整合性を有していると考えられる。妥当性については、中井（2015）が対人関係の観点から作成した幼児用自尊感情測定尺度の自己有用感との間に本研究で作成した幼児用自尊感情尺度の自己肯定感尺度との弱い相関が見られた。自己受容尺度については相関が見られなかったが、この背景には、自己有能感、自己効力感、自己有用感という自信につながる因子と自己受容尺度のできなくてもだいじょうぶ、自信がなくてもそのままでもいいという内容とは乖離があるためと考えられる。以上より、幼児用自尊感情尺度は一定の妥当性を有していると考えられる。

次に、誕生日会の祝い方は違うが、当番活動の取り組みは同じような A グループでは、幼児用自尊感情尺度、下位尺度の自己肯定感尺度および自己受容尺度いずれにおいても有意差は見られず、仮説を支持する結果は得られなかった。A グループの誕生日会での比較は、子ども自身の誕生日が調査の時期と離れていると記憶が薄れている場合があることや、まだ自分の誕生日を経験していない子どももいるということ、また、園生活における自尊感情が育つ多様な要因が園 a、園 b 共に園生活の中にあることを示唆しており、結果に影響を与えていると考えられる。

また、当番活動の取り組み方は違うが、誕生日会の祝い方は同じような B グループでは幼児用自尊感情尺度、自己受容尺度で有意差が見られ、いずれも園 b のほうが得点が高かった。つまり、仮説とは反対の結果であった。この結果の原因について推察するために各項目ごとの平均も比較を行った。その結果、3 項目で有意差が見られた。B グループの当番活動での比較は、当番活動が年間を通して行われ、日々、交代しながらクラスの全員が繰り返し経験をする取り組みであり、経験が積み重ねられていく活動であるということがわかる。有意差のあった“できないことがあってもだいじょうぶだと思います”、“失敗してもだいじょうぶだと思います”、“私にはいいところがたくさんあります”の 3 項目は、自分のできること、できないことなどすべての要素を包括した意味で

Table 6 当番活動の違いによる2群の幼児用自尊感情尺度の各項目の平均点とt検定の結果

		(Bグループ)				
項目	園	平均値	標準偏差	t値	有意水準	
1 私は皆と仲良くできていると思います	a	3.37	.77	.39	n.s.	
	b	3.32	.84			
2 私はどんなことも一生懸命できます	a	3.19	.70	.15	n.s.	
	b	3.18	.82			
3 私は大事な子どもだと思います	a	3.41	.77	.83	n.s.	
	b	3.32	.81			
4 皆は私のことが好きだと思います	a	3.16	.81	1.29	n.s.	
	b	3.00	.95			
5 できないことがあってもだいじょうぶだと思います	a	2.52	.96	3.67	p<.01	
	b	3.01	.98			
6 私は自分のことが大好きです	a	3.19	.82	.37	n.s.	
	b	3.14	.98			
7 誰かが困っていたら助けたいと思います	a	3.22	.84	.76	n.s.	
	b	3.13	.93			
8 失敗してもだいじょうぶだと思います	a	2.48	.97	2.33	p<.05	
	b	2.77	.84			
9 私はこのままですてきだと思います	a	3.10	.80	1.30	n.s.	
	b	3.25	.83			
10 困ったことがあったら、誰かに「助けて」と言えます	a	2.95	.90	.26	n.s.	
	b	2.92	.94			
11 私にはいいところがたくさんあります	a	3.11	.65	3.62	p<.01	
	b	3.45	.69			
自己肯定感尺度	a	15.96	2.46	.53	n.s.	
	b	16.16	2.88			
自己受容尺度	a	7.95	2.21	2.56	p<.05	
	b	8.70	2.01			
幼児用自尊感情尺度	a	23.92	3.88	1.67	p<.10	
	b	24.85	4.23			

N: 園 a=108 N: 園 b=101

の自分をありのままにかけがえのない存在であると感じる自己受容感という自尊感情の大切な側面を表している。仮説通りではなく、この3項目で有意に園bのほうが高かった。その要因は、園aのほうが当番の役目がより特別な内容で責任が伴うため、しっかりやらなければいけないという気持ちが表れたのではないかということが推察される。園aは、当番の役目として“昼食時、降園時の挨拶”、“片づけの時の掃除”、“給食の配膳”に加えて“朝の会、終わりの会の司会・進行”という役目がある。これは、子ども達が会をリードし、進める中でクラスの友達の発言を促し、受けとめるという役目であり、子ども達も試行錯誤する姿が見られるという園長の話もあり、その段階では自尊感情が一時的に低下するかもしれ

れない。しかし、回数を重ねていく内に自信をもって取り組むようになり、また、お互いを認め合うことにつながる可能性もあるのではないだろうか。

本調査のAグループの比較では誕生日会の違いによって自尊感情の差は見られなかったが、誕生日会は当番活動と違って日々行う活動ではないため、誕生日会を経験している子どもも経験していない子どももいる中で、1回のみ自尊感情を測定する方法が適切ではなかった可能性がある。調査において、誕生日会がすすんでいる子ども、すすんでいない子どもというデータについても収集していれば得点比較も行うことができたが、調査時点ではそういった要因の想定ができていなかった。そこで、誕生日会の前と後で自尊感情に変化が見られるのかとい

うことを確認するために、幼児用自尊感情尺度を用いて追加調査を行うこととした。

IV. 追加調査

1. 目的

誕生日会の日の前後で子ども達の自尊感情の変化を図り、誕生日会の取り組みが子どもの自尊感情に及ぼす影響について検討する。仮説としては、誕生日会の前より後のほうが子どもの自尊感情の得点は高くなっているだろうと想定した。併せて、幼児用自尊感情尺度の適用の可能性を確認する。

2. 方法

(1) 調査対象者

本調査の A グループの内の認定こども園 a に通う 11 名の 11 月生まれ、もしくは 10 月生まれだが 10 月の誕生日会に欠席した年長児、年中児（年長児：6 名、年中児：5 名）。

園 a では、誕生日会の日にその月に誕生日を迎えた子どもの保護者が来園し、特別なプログラムの中で共に過ごしてお祝いをしている。保護者は子どもが生まれる前から今日までのこと、子どもに対する思いをクラスの子ども達に話すという取り組みを行っている。

(2) 調査期間

当園の 11 月の誕生日会の 3 日前と誕生日会の 4 日後。

(3) 調査材料

幼児用自尊感情尺度（Table 3）を使用する。

(4) 手続き

追加調査に際して、実施を受け入れた認定こども園の園長、担任 2 名と調査の目的や内容について説明、話し合いを行って理解を求めた。

調査の手続きについては本調査と同様である。すなわち、保育室とは別の部屋を利用し、個別式対面面接法で行った。面接は昼食後順次行い、一人につき面接時間は 10 分から 15 分程度とした。

3. 結果

幼児用自尊感情尺度およびその下位尺度、さらに尺度の各項目を用いて、誕生日会前と誕生日会后という二つの変数の代表値に差が見られるかどうかを検定する Wilcoxon の符号付き順位和検定を行ったところ、自己肯定感尺度 ($p < .01$)、自己受容尺度 ($p < .05$)、幼児用自尊感情尺度 ($p < .01$) で有意差が見られた。原項目の 3. “私は大事な子どもだと思います”、4. “皆は私のことが好きだと思います”、6. “私は自分のことが大好きです”、8. “失敗してもだいじょうぶだと思います”、9. “私はこのままですてきだと思います”、11. “私にはいいところがたくさんあります” の 6 項目においても有意差が見られ、いずれも誕生日会后のほうが得点が高かった。Wilcoxon の符号付き順位和検定の結果を Table 7 に示す。

Table 7 幼児用自尊感情尺度の Wilcoxon の符号付き順位和検定の結果

項目内容	誕生日会前の 平均値	誕生日会后の 平均値	Z	有意水準
1 私は皆と仲良くできていると思います	3.18	3.18	.00	<i>n.s.</i>
2 私はどんなことも一生懸命できます	3.27	3.27	.00	<i>n.s.</i>
3 私は大事な子どもだと思います	2.64	3.55	2.89	$p < .01$
4 皆は私のことが好きだと思います	2.91	3.64	2.27	$p < .05$
5 できないことがあってもだいじょうぶだと思います	3.27	3.46	1.41	<i>n.s.</i>
6 私は自分のことが大好きです	2.91	3.55	2.65	$p < .01$
7 誰かが困っていたら助けたいと思います	3.09	3.27	1.41	<i>n.s.</i>
8 失敗してもだいじょうぶだと思います	3.00	3.46	2.24	$p < .05$
9 私はこのままですてきだと思います	2.73	3.27	2.45	$p < .05$
10 困ったことがあったら誰かに「助けて」と言えます	2.55	2.73	1.41	<i>n.s.</i>
11 私にはいいところがたくさんあります	3.18	3.82	2.65	$p < .01$
自己肯定感尺度	20.64	24.27	2.96	$p < .01$
自己受容尺度	12.09	12.91	2.26	$p < .05$
幼児用自尊感情尺度	32.73	37.18	2.95	$p < .01$

4. 考察

幼児用自尊感情尺度を用いて誕生日会の3日前、4日後という近い日程で追加調査を行った。仮説通り、下位尺度も尺度全体も得点が上がっていた。誕生日会前に行った調査の結果は、本調査の結果とほぼ変わらないものであった。誕生日会後に行った調査では、誕生日会前の結果と比べ、1. “私は皆と仲良くできていると思います”と2. “私はどんなことも一生懸命できます”の2項目は平均点に変化がなかったが、他の9項目はいずれも平均点が上がっていた。また、9項目の内6項目に有意差があった。これらの背景には、直前の誕生日会において園で保護者と共に過ごし、その中で保護者一人一人がその子どもの生まれる前から現在までの生い立ち、子どもに対する親の思い等をクラスの子も達に話すという毎月行われている誕生日会でのプログラムが大きな影響を与えていると思われる。保護者の言葉が子どもの心に響き、動かし、それが子どもの心に変化をもたらしたと考えられる。

中でも最も平均点が上がった項目は“私は大事な子どもだと思います”であり、これは親の思いの中心にあることと考えられ、そのことが誕生日会当日の保護者の話を聞くことによって子ども達に伝わった結果であろう。次いで“皆は私のことが好きだと思います”、“私は自分のことが大好きです”、“私にはいいところがたくさんあります”、“私はこのままですてきだと思います”、“失敗してもだいじょうぶだと思います”の順であった。ありのままの自分を受けとめ、できること、できないことなどすべての要素を包括した意味での「自分」をかけがえのない存在として捉える気持ちが高くなったことが表れている結果と言える。

菅(2010)が「親が子どもに与えることのできる最高の贈り物は、無条件の肯定的な自己像を育むことである」と述べているように、子どもがありのままの自分を「これでよい」とする基本的自尊感情を育むためには、ありのままの子どもを「これでよい」と受け入れる親の存在が必要であると言える。

以上より、誕生日会の取り組みを通して、子どもの自尊感情の明らかな変化をみることができた。そして、幼児用自尊感情尺度を構成している具体的な質問項目の内容と子ども達の反応から、子どもの自尊感情の育ちを因るために適用が可能であるという結果が得られた。

V. 総合的考察と今後の課題

本調査の結果のt検定では、誕生日会の祝い方の違いによって自尊感情の育ちに有意差は出なかった。誕生日

会の祝い方の違いだけで差がつくのではなく、どちらの園でも一人一人の子どもと保護者、保育者との関係性の中で、子どもが自分の存在をありのまま大切にであると感ずることのできるような良好な関係が築かれており、その結果が影響を与えていると考えられる。当番活動の取り組み方の違いの方は自尊感情の育ちに有意差が見られた。園aは、特別な役目が組まれており、園bは、生活の中のお手伝い的な役目を行っている。自己有能感、自己有用感、自己受容感が自尊感情を構成する要素であり、当番活動の取り組みの違いが異なる影響を与えている可能性が示された。子どもが主体的に活動することができる環境の中で他者から必要とされ、自分ならできるといった期待感をもって取り組むことが大切であるということが考えられる。ただし、当番活動以外に、保護者の特徴による要因が反映されている可能性もあり、さらに検討していく必要がある。たとえば、「教育に関心が高い」といっても、小学校受験に対する希望の度合いが異なる場合がある。受験を強く希望する家庭では、保護者の姿勢が子どもの自尊感情に影響することもあるのではないかと考えられる。

本調査を行う中で、家庭の問題を抱えている一人の子どもの調査の結果を教えてほしいと園長から依頼を受けた。結果はすべての項目において低いものであった(平均1.636)。追加調査を行った折に再度調査を行う機会があったが、11月の本人の誕生日会に保護者は欠席しており、担任が代わりにメッセージを伝えるために母親に電話で小さい頃の話聞いても「忘れた」と拒否する態度を示されたということであった。追加調査の誕生日会前の調査では平均点が前回と全く変わらず低かったが、誕生日会後の調査では、“私にはいいところがたくさんあります”という1項目のみが高くなっていった。これは、誕生日会の特別なプログラムとして友だちの保護者から子どもの小さかった頃の話、子どもへの思い等を聞く機会を得たことにより、自分もありのままにいいところがたくさんあることに気付くことができたということだと考えられる。このことを通しても、保育・教育現場における幼児用自尊感情尺度の適用の可能性が示されたと考えられる。

さらに、誕生日会を経験することによる幼児の自尊感情の変化を明らかにし、幼児用自尊感情尺度の適用の可能性を確認するために行った追加調査から、誕生日会で保護者に自分の子どもが生まれる前から今日までのことを保護者の思いをこめて話してもらおうという取り組みを通して、子ども達が自尊感情を構成する要素である一人の子どもの存在がどれほど大切でかけがえのないものであるかということに気付き、自己肯定感、自己受容感が

育まれていることがわかった。

近藤（2007）は、「子ども達が様々な感情を友達や先生と共有することにより、基本的自尊感情はより確かなものとなる」としている。毎月行われる誕生日会を通して友達の保護者から話を聞く機会を得て、自分だけではなくクラスの一人一人の子どもがどれほど大切な存在であるかということに気づき、その喜びを共有することで子ども達の自尊感情はより確かなものとして育っていることが感じられた。

自尊感情とは自分の存在に対する確かな安心感を得ることによって育まれる感情である。つまり、自尊感情を育むためには、ありのままの自分を「これでよい」と実感できる環境が必要なのである。

本研究では、幼児の自尊感情を育てる実践の場における具体的な取り組みとして誕生日会、当番活動に注目してきた。誕生日会が子ども達の誕生日を祝う行事として大切にされ、誕生日会ならではの特別なプログラムの中で一人一人の子どもが生まれたこと、成長してきたことを喜び合うこと、特に保護者が出席して子どもの生まれる前から今日までの育ちや親としての思いをクラスの子ども達に話してもらおうという取り組みは、一人の子どもがありのまま素晴らしくてかけがえのない大切な存在であるということを感じる貴重な機会になっていること、また、それは友達のこととしてだけではなく、聞いた子ども達にとっても同じように自分もかけがえのない大切な存在であることを知る機会になっていたことを確認することができた。

また、当番活動については、挨拶、掃除、食事の配膳といった日常的な生活の中での役目だけではなく、朝の会、終わりの会の司会、進行という子ども達にとって少し特別な役目を行うかどうかによって自尊感情に違いが見られた。特別な役目を行うことは、試行錯誤しながらも積み重ねていくことによってスムーズに行えるようになり一人一人の自信につながると共に、互いのよさや頑張りを受けとめ合う機会になる可能性もあると推測される。年齢に応じて内容を検討し、少し特別な活動を取り入れていくことも自尊感情を育てていく上で考慮に値するものであると考えられる。

幼稚園、認定こども園、保育所はほとんどの子どもにとって集団生活を体験する初めての場所である。子どもが家庭から出て、様々な人との関わりを経験する場所においてその心身の成長発達を預かる責任は大きい。意識的に子どもの自尊感情を育てていこうとすることで、その育ちを確かなものできると考えられる。その中で一人一人の子どもの成長を感じたり、感謝や感動を感じたそのことを丁寧に言葉にして伝えていくことで、子ども

自身がありのままの自分を信じ、「これでよい」と受け入れることができるのだと考えられる。

今後の課題としては、本研究における事前調査以外の調査では幼稚園、認定こども園に通う幼児を対象とした点が挙げられる。事前調査で保育所は保護者の就労により誕生日会がもちにくいという回答を複数得たが、今後は保育所に通う幼児についても調査を実施することが必要だと思われる。

また、事前調査の結果を踏まえて本調査を行う A グループ、B グループ各 2 園を選び出したが、今後は園の数を増やして、様々な保育方針を背景にした子ども達の自尊感情の育ちについて検討することが必要である。追加調査において、誕生日会の取り組みによって子どもの自尊感情の明らかな変化が見られたが、この効果の持続性についてもデータをとることが必要だと思われる。さらに今回は、調査の時点で誕生日を迎えていない子どものデータはとっていなかったが、それについても調査を行い、研究を深めることとしたい。本研究では、誕生日会、当番活動を取り上げたが、他の活動についても問題意識をもって自尊感情を育てる配慮点を見出すことが求められていると考えられる。

引用文献

- 青木みのり（2013）ほめることの効用：自己肯定感・やる気を高める 児童心理, 4, 金子書房 pp.11-17.
- 古荘純一（2009）日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか児童精神科の現場報告 光文社新書
- 古荘純一（2014）読者インタビュー-QOL調査から見る子どもの自尊感情 総合教育技術, 7 pp.12-15.
- 虎杖真智子（2014）児童の自尊感情の発達に関する実践的研究 大阪総合保育大学大学院博士論文
- 勝浦美和（2014）自尊感情を育む保育における留意点及び指標 四国大学紀要, (A) 43 pp.1-11.
- 近藤卓（2007）生きる力を支える自尊感情 児童心理, 7, 金子書房 pp.45-46.
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書 ひかりのくに pp.30-31.
- 眞榮城和美（2010）セルフエスティームを高める要因—これまでの研究の中から 児童心理, 3, 金子書房 pp.304-310.
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説 フレーベル館 p.24
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2015）幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館 pp.38-39.
- 中井美希（2015）幼児期における自尊感情の発達 大阪総合保育大学紀要, 第 10 号 pp.109-126.
- 中嶋郁雄（2014）子どもの自己肯定感を高めるための叱る技術 総合教育技術, 7 pp.16-21.
- 中間玲子（2007）自尊感情の心理学 児童心理, 7, 金子書房 pp.13-14.

日本青少年研究所 (2011) 高校生の心と体の健康に関する調査
 Rosenberg.M. (1965) Society and the adolescent self-image, Princeton university Press
 佐々木正美 (1998) 子どもへのまなざし 福音館書店
 下田芳幸 (2011) 健康な心と体・道徳的実践の心を育てる教育研究Ⅳ 富山市教育センター紀要 pp.92-125.
 汐見稔幸 (1997) ほめない子育て—自分を好きと言える子に栄光
 園田雅春 (2013) ほめるところを見つける方法 児童心理, 4, 金子書房 pp.441-446.
 園田雅代 (2007) 今の子どもたちは自分に誇りをもっているか 児童心理, 7, 金子書房 p.2.
 菅佐和子 (2010) 親が注ぐ無条件の愛と自己肯定感 児童心理, 3, 金子書房 pp.311-316.
 田中沙織 (2015) 幼児期の当番活動を通じた自己の調整について 大阪総合保育大学大学院修士論文
 山宮まり子 (2013) 心に届くほめ方をする: 気をつけたいポイント 児童心理, 4, 金子書房 pp.453-457.

参考文献

Denis Lawrence (2008) 小林芳郎(訳) 教室で自尊感情を高める—一人格の成長と学力の向上をめざして— 田研出版株式会社
 榎本博明 (2011) 子どもの自己認識の発達—自分の長所・短所をどう知っていくのか 児童心理, 6, 金子書房 pp.13-19.
 福田俊彦 (2014) 自分のよさを生かす、互いを認め合う係活動の工夫 児童心理, 6, 金子書房 pp.70-74.
 グレン・R・シラルディ 自尊心を育てるワークブック 高山巖(訳) 金剛出版
 浜谷直人(編/著) (2013) 仲間とともに自己肯定感が育つ保育—安心の中で挑戦する子どもたち かもがわ出版
 堀洋道監修 櫻井茂男・松井豊編 (2007) 心理測定尺度集Ⅳ—子どもの発達を支える<対人関係・適応> サイエンス社 pp.18-37.
 亀谷純雄 (1999) 自己発達の心理学 文化書房博文社

加藤悠・中島美那子 (2011) 母親の自尊感情と養育態度—子どもの自尊感情を育むために— 茨城キリスト教大学紀要, 45, 119, 人文科学 pp.119-129.
 鯨岡峻 (2013) 子どもの心の育ちをエピソードで描く—自己肯定感を育てる保育のために— ミネルヴァ書房
 鯨岡峻 (2015) 保育の場で子どもの心をどのように育むのか—「接面」での心の動きをエピソードに綴る— ミネルヴァ書房
 水落正明 (2014) 子どもの自信・自己肯定感の形成と家庭・学校・地域 南山経済研究, 29(2) pp.87-98.
 元永拓郎 (2014) 自己肯定感の育つ環境 児童心理, 6, 金子書房 pp.33-40.
 夏見欣子 (2012) 自分を大切にできない子の諸相 自分のよさに気づいていない 児童心理, 8, 金子書房 pp.38-42.
 島田静 (2014) わたしたちがお腹の中で赤ちゃんだった時—自分が愛されて生まれてきたんだということを感じる経験を通して自己肯定感をはぐくむ— あいち保育研究所研究
 汐見稔幸 (2004) 子どもの自尊心を育てる家族・育てない家族 児童心理, 2, 金子書房 pp.120-126.
 園田菜摘 (2013) 幼児の有能感・受容感と母親の自尊感情、しつけ行動との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ, (人文科学) 15 pp.1-7.
 田島賢侍・奥住秀之 (2013) 子どもの自尊感情・自己肯定感についての定義及び尺度に関する文献検討—肢体不自由児を対象とした予備調査も含めて— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ, 64 pp.19-30.
 高垣忠一郎 (2004) 生きることと自己肯定感 新日本出版社
 高垣忠一郎 (2009) 私の心理臨床実践と自己肯定感 立命館社会論集, 45-1 pp.3-14.
 友利久子・嘉数朝子・大城一子・仲程えり子・金城朝成・仲村美鈴 (2004) 資料 子どもの自尊感情の発達と親子のコミュニケーションスタイル 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 6 pp.111-133.
 渡辺俊太郎・小玉正博 (2001) 怒り感情の喚起・持続傾向の測定—新しい怒り尺度の作成と信頼性・妥当性の検討— 健康心理学研究, 14(2) pp.32-39.

Initiatives for Developing Self-esteem in Early Childhood : Through Events and Activities in Childcare and Education Settings

Fumiko Yaezu

JONANGAKUEN Nursery School

This study aimed to identify concrete activities that cultivate a “sense of self-esteem” by focusing on “birthday party” and “duty activities” as concrete nursery activities, and to develop a scale to measure infants’ self-esteem so as to identify the difference between “birthday party” and “duty activities” as activities.

The “infant’s self-esteem scale” developed in the present study comprised self-affirmation and self-acceptance factors that are included in the definition of self-esteem in this study. Based on the survey, the tool showed optimal reliability and validity. The study revealed a significant difference between the “infant self-esteem scale” and “self-acceptance scale” in terms of the development of self-esteem depending on the engagement in duty activities. The concrete content of the questions on the “infant self-esteem scale” and the children’s response showed that the scale is appropriate for measuring the development of children’s sense of self-esteem.

The follow-up survey measured changes in children’s self-esteem before and after the “birthday party” and it confirmed the applicability of the “infant’s self-esteem scale.” Through engaging in the “birthday party” activity, children’s scores on the “infant’s self-esteem scale,” “self-affirmation scale,” and “self-acceptance scale” increased significantly, which points to explicit changes in children’s sense of self-esteem.

It is suggested that children’s self-esteem can be strengthened by actively encouraging its development in nurseries and other places of education.

Key words : infants, self-esteem, self-affirmation, birthday party, duty activities